

令和7年度 舞鶴市総合教育会議 会議録

<開催日時>

令和7年10月3日（金） 10:00～12:00

<開催場所>

中公民館 401会議室

<出席者>

市長	鴨田	秋津
教育長	廣瀬	直樹
教育委員	稗田	洋子
教育委員	四方	あかね
教育委員	小川	喜生
教育委員	相澤	雅文
教育委員	吉岡	裕美子

ファシリテーター 松岡教育振興部長

<傍聴人>

1名

<次第>

1. 市長あいさつ

2. 協議

- (1) 舞鶴で育った子どもたちが、将来戻りたいと思えるよう教育ができること
- (2) 毎日通いたくなる（通いたい）魅力ある学校づくり

3. その他

4. 閉会

1. 市長あいさつ

皆さんおはようございます。本日は大変お忙しいなか、舞鶴市総合教育会議にご出席を賜りましてありがとうございます。

また、委員の皆様には日頃から本市の教育行政に多大なるお力添えを賜っておりますことを、改めてこの場をお借りして感謝を申し上げます。

昨年の総合教育会議では、学校規模の適正化に向けたテーマで議論をさせていただき、各委員の皆様から忌憚のないご意見をいただきました。その内容も取り入れながら、今月には舞鶴市の小・中学校の規模適正化におけるビジョンが策定される予定となっております。

現実的に人口が減少している中で、複式学級の編成を行う小学校が生じていたり、保護者からはより良い教育環境になるよう何とかしてほしいという声も直接聞いたりしております。やはり行政だけで進めることはできないものの、私達が人口減少社会を正面から捉え、子どもたちにとって、どのような教育環境が必要であるのかという議論を現在行っているところです。

教育に関して、舞鶴市の現在の取組を少しご紹介いたしますと、昨年から中学校で先行して給食費の無償化を実施してまいりました。いよいよ今年度3学期から小学校においても給食費の無償化が実現する予定です。

加えて、給食の食材についても、地元のものを積極的に取り入れていきたいという考え方のもと、現在お米については、舞鶴産コシヒカリを100%活用しております。また、魚料理では、これまで地元の魚の使用率が50%だったものを今年度は100%使用するという取組を開始しております。さらに今後、野菜や調味料についても、できるだけ舞鶴産、京都府産のものを積極的に使い、食を通じた郷土愛の醸成を図ってまいりたいと考えております。

学校のハード面については、中学校体育館への空調導入を4年間かけて実施していく予定です。加えて、学校のトイレの洋式化率が京都府内で最下位という背景もあり、今年度から3年間で全国平均を上回ることを目指し、洋式化の整備に取り組んでいるところです。

最後に、現在中学校において部活動の地域展開の取組を進めております。舞鶴市は京都府内でも率先して、令和3年度から実施しております。地域展開の目指すところとして、子どもたちがスポーツ、文化いずれも主体的にやりたい部活動を選べるということ、そして子どもたちにとっては、平日は学校の先生に教えてもらっていますが、土日はいつも教えてもらっていない指導者から指導を受けることによって、より子どもたちの経験の幅が広がっていくということがあげられます。加えて競技力の向上という意味においては、優秀な成績が期待できる場合もあります。

もちろん勝ち負けだけではなく、仲間・友達と一緒にスポーツ活動や文化活動をしたいという子どもたちの選択肢にもなっておりますし、さらに、地域にはそれぞれ

れのスポーツや文化に長けておられる方が多くいらっしゃいますが、そうした方々が子どもたちに指導できる環境というのは、地域の活性化にも繋がっていくと確信しております。この取組については、昨年度「舞鶴市部活動地域展開推進計画」を策定し、令和8年度2学期からは、全中学校で休日の部活動を地域に展開することを目指し、現在様々な調整をしながら進めているところです。

以上、現在の舞鶴市の取組をご紹介いたしましたが、今日は2つの大きなテーマについて、ぜひ皆様から忌憚のないご意見をいただきたいと思います。本日の会議は、何かを結論付けたりゴールを導いたりする場ではなく、未来の子どもたちのため、委員の皆様には様々な視点からご意見を賜り、今後の教育委員会の施策に繋げてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

2. 協議

(1) 舞鶴で育った子どもたちが、将来戻りたいと思えるよう教育ができること

(松岡教育振興部長)

子どもたちが、将来進学や就職で一度舞鶴を離れても、「いつか戻ってきたい」と思えること、教育を通じて子どもたちが舞鶴の魅力や可能性を認識し、将来のキャリア選択肢の一つとして舞鶴を考えるきっかけをつくるためにどうすればよいかという点をご議論いただきたいと思いますというものであります。

本市では、令和2年3月に「舞鶴市人口ビジョン」を作成し、人口動態の現状、地域特性等を分析しております。議論の前に舞鶴市の人口の状況をビジョンから分析結果を紹介しますと、出生数、死亡数による自然増減と、舞鶴市への転入数、転出数による社会増減の2つの要因がある中で、まず自然増減については、2004年以降は減少に転じており、近年では年400人を超えて減少している状況にあります。

また、社会増減については、「本市には大学が所在しないため大学等への進学による転出増」と、「海上自衛隊、海上保安庁、海上保安学校、舞鶴工業高等専門学校等が所在し、全国各地に赴任、就職するため転出すること」がある中で、近年は転出数を転入数が大きく上回る状況が続いており、2009年以降は年500人～700人台の減少で推移しています。

そのような現状がある中、どのような将来を考えるときにも、選択肢の一つとして舞鶴市を選ぶきっかけの一つになるよう、「ふるさと舞鶴」への愛着を育むため、学校で取り組んでいる状況を事務局から説明させていただきます。

(事務局)

学校教育においては、主に郷土愛を育む・ふるさとを知る取組を、総合的な学習の時間やその他教科の中でも学習しています。

特に生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域に目を向けた探究的な学びを重視しています。地域の方々を講師としてお招きし、地域の特性や資源を活かした教

育活動を展開することで、子どもたちの学びを深め、「ふるさとを愛する心」の醸成に努めています。

例えば、商店街の史実を調べ、商店街をさらに盛り上げるために試行錯誤を続ける中で、商店街のスタッフとして加えていただき、一緒に企画を考えたり、自分の住んでいる地域の魅力ある場所にQRコードを設置し、地元や観光客から声を集めて、よりよい観光地になるよう考察するプロジェクトを進めるなどして、自分の住む地域を知り、興味が持てるようにしております。

その他に、市内の小学6年生全員を対象に、舞鶴市の歴史を深く学ぶ「ふるさと学習」を実施しています。事前学習から引揚記念館の見学までの一連の活動を通して、舞鶴市が歩んできた道のり、特に平和の尊さについて史実に基づいて学んでいます。

また、市長と教育長が話をされる中で、現場の教員にも舞鶴市の事業所等についてより知ってもらい、児童・生徒への日々の指導に活かしてもらうために、令和7年度より新規採用教員を対象とした研修会を実施しています。この研修では、舞鶴の文化、産業、自然など幅広い分野を学び、教員自身がふるさと舞鶴への理解を深めることで、より質の高い指導に繋げていくことを目的としております。このように、ふるさと舞鶴や地元地域への誇りと愛着を生み、やさしく豊かな心と平和を愛し将来を展望する力の育成に努めております。

（松岡振興部長）

現在の取組は、事務局の説明があったとおりですが、子どもたちが成長し、ずっと舞鶴に暮らし続ける、進学のために舞鶴を離れる、あるいは他の場所で就職するなど、それぞれの未来がある中で、選択肢の一つとして「舞鶴」について考えるきっかけとなるようなことを教育の中でできることは何か、ご意見いただけたらと思います。

人口減少、子どもたちに戻ってきてもらうという課題については教育だけではなくて市の課題として多くの部署でも認識をしております。今回課題を設定させていただく中で、市長からはぜひこの話をしたいということも聞いておりますので、まずは市長から、思いやご意見をいただけたらと思います。

（鴨田市長）

子どもたちが「舞鶴に帰ってきたい」と思うには様々な要因があると思います。これは学校教育だけの問題ではありませんし、家庭教育、社会教育、そもそもまちの魅力も大きな要因になっていると思っています。

先ほど事務局の説明の中で、舞鶴市には大学がないということがありましたが、仮に大学が1つあったとしても、子どもたちは様々な大学に行きたいわけですから、それが問題の解決には大きく繋がらないと思っています。ですから、専門性を学んだ上で、そのキャリアを我がまちで発揮したいと思ってもらえることが大事だと思っています。

その上で、私が日々課題だと認識しておりますのは、学校教育において、例えば、地域の魅力や、舞鶴にどんな仕事があるのかを伝える立場の人たちが、まず舞鶴のことをどのくらいご存知なのかという点です。なぜかという、若い先生方が増えていて、舞鶴市外の出身の方も多くいらっしゃる中で、教えるにしても地域の歴史や舞鶴の産業について深くご存知ないのではないかと思いますからです。先生方が舞鶴の良さ、歴史の深さを、心を込めて子どもたちに伝えられる環境を整える必要があるのではないかと考えたとき、新任の先生方に舞鶴について知ってもらえる機会を作っていければいいのではないかと、先生方への研修の一環として舞鶴について知ってもらう企業見学等のふるさと学習の取組を採り入れ始めたところです。

学校教育の効果として、実際に舞鶴に何人帰ってきたかを可視化することは難しいとは思いますが、子どもたちに魅力を感じてもらえるように、学校教育でできることはまだまだあるのではないかと考えています。

（松岡教育振興部長）

新任の先生方への「ふるさと学習」についてですが、最近の新卒の教員の方々の傾向として当然舞鶴市内出身の方だけじゃなく、いろんなところから就職をしていただいてますので、市内の企業のことや、どのような産業があるかなどを知らない先生もいらっしゃいます。そこで、ふるさと学習を実施したのですが、参加された先生方にアンケートをとったところ、大変好評でした。「またぜひ続けてほしい」という意向も聞いておりますので、継続していきたいと考えています。

そのような大人たちがまちを知って、子どもたちに教えていくということも大変重要だと思いますけども、学校で教員の経験が長い稗田委員、ご意見いただけますでしょうか。

（稗田委員）

実はそのことについて、私も最初にお話ししたいと思っておりました。まずは、将来戻ってくるかどうかという最終的な結果は分からない、多様な要因があるにせよ、子どもたちが「私達が生まれ育った舞鶴って素敵だな、誇りに思えるな」と思えるかどうかがとても大切であると思います。その中で、現在行っていること、あるいはすぐにでもできることとして、総合的な学習の時間や探究的な学びは、非常に効果的だと感じています。

人づてに聞いた話で真意は明らかではありませんが、ある学校の先生が「舞鶴みたいな田舎には戻ってこないほうがいい」とおっしゃったとのこと。もしかしたら、グローバルな視点を持ってほしいという意味でおっしゃったのかもしれませんが、子どもたちにとって一番身近な大人である教師の発言は、非常に影響力が大きいと思ったわけです。教師が私生活にせよ、仕事にせよ充実して日々過ごしているかということも、子どもたちに大きく影響してくると思いました。

そして総合的な学習は、子どもたちが舞鶴の様々な大人と出会う大切な学習だと感じています。総合的な学習の時間は平成14年度からスタートし、当初は工夫を凝らして行っていましたが、しばらくすると、4年生は福祉、5年生は国際理解教育というように、形骸化しつつありました。

ところが、最近いろいろな学校の取組を拝見する中で、事務局の方からもご報告いただいたように、子どもたちが地域の課題だと思うことに対して主体的に調べ、解決策を考えて発信していくといった学習が広がってきていることに非常に期待しているところです。子どもたちが地域の方々をはじめ多くの魅力的な方々と触れ合っていくことが、結果として最も舞鶴が好きになり、魅力を感じるようになるのではないかと思います。

以前、子どもたちが舞鶴の不満なところとして「ショッピングモールもテーマパークも無く、何も無い」と言っていました。しかし、それらができたから舞鶴に戻ってくるかというと、決してそうではないと思います。やはり「人」が大切であり、授業の支援をしてくださっている地域の方々に「地域魅力発信大使」のような役割を担っていただき、様々な学校で子どもたちと触れ合う機会を増やしていくことができればいいと思っています。

若手教員が舞鶴の魅力を知らないのではないかという点は、私もそのように感じています。以前教育長から、日本板硝子(株)や関西電力(株)舞鶴発電所を回った際に、その技術力の高さやSDGsに貢献しておられること、日々切磋琢磨しているといった話を聞き、教職員がびっくりしていた、と伺いました。今年初めての取組だと伺いましたが、ぜひ続けていっていただきたいですし、これは新規採用教員に限らない課題ではないかと感じました。

(小川委員)

私も学生時代は「舞鶴には戻ってこない」と思っていました。今でこそインターネットで世界中と繋がっていますが、当時は舞鶴を出て大阪やアメリカなど様々なところに行きたいと考え「もう帰ってくることはない」と思っていました。気がつけば帰ってきていました。

きっかけは様々ですが、教育の中で舞鶴の良さを実感するには、時間が経たないとわからないこともあります。また、海や山といった自然の中で育つと、かえって舞鶴の良さがなかなか分からないものだと思います。

新任の先生方にふるさと教育をされているとおっしゃいましたが、テレビ番組のように、学校対抗で舞鶴の魅力を子どもたちと一緒に先生も勉強して、発表して、何か景品がもらえるなど、大会形式で魅力発見を競い合うというのは、非常に良いのではないかと思います。それによって先生方も勉強になりますし、子どもたちも「こんなにもいいところがある」というのが見えてくると思います。実際に住んで

いると地域の魅力が当たり前になってしまい、良さに気がつかないことが多いので、そうした機会を設けることも教育の中に必要だと思います。

（相澤委員）

稗田委員や小川委員からお話がありましたが、地域の良さを教えられなければ、子どもたちの印象に残っていかないという面はあると思います。ふるさと学習でも体験はすると思いますが、それが単に教えてもらうだけなので、そうではなく、自分たちからこの地域の良さを発信していくということを総合的な学習の時間や探究の時間で行うことで、一つの喜びにつながっていくと思います。

義務教育学校や小中一貫校の検討を進められているというようなことが資料にありましたが、学校規模ということもありますが、縦割りをどう有効に活用していくのかという点を検討してみるのもいいと思います。ちょうど義務教育学校ができた頃に日本各地の学校を回りましたが、ある学校は比較的小規模だったために1クラスで9年間クラスのメンバーが一緒ということが起こっていました。そうするとクラスの中で勉強できる子、足の速い子みたいなことが大体固定化され、そのまま9年間過ごすことにより、クラスの中で活躍できる場が見つけれない子が出てきます。

ただ縦割りで掃除をしたりすると、中学3年生が1人で机を持ち上げると、小学1年生に「すごい」と言ってもらえることもあります。そういった縦割りの中で、活躍できる自分を実感したり、憧れの人を見つけて「ああいう人になりたい」と思うようになったり、縦の社会で繋がっていくということが学校の中でできることだと思います。

それから、伝統を繋ぐといった、地域の中で主体的に何かを作り上げていくことが、人と人を繋ぎ、「あの人のようになりたい」という気持ちも生まれてくるのだと思います。同僚に、地元のお祭になると帰省する人がいます。地域の中で起っていることに、自分も一生懸命取り組む。盆踊りなども、「友達と何かをした」という経験であったり、お祭りや盆踊りなど地域の中で共に何かを作り上げたりしたことなど、参加して得た楽しい思い出が積み重なっていくことが、故郷を離れたときに、故郷の良さとして感じられるのではないかと思います。

（松岡教育振興部長）

四方委員、いかがでしょうか。

（四方委員）

稗田委員のお話にもあったように、ある学校の先生が「舞鶴みたいな田舎には戻ってこないほうがいい」とおっしゃったのは、「もっとグローバルに目を向けなさい」ということの裏返しで言われたのかもということ是最もだと思います。

小川委員がおっしゃっていましたが、ずっと舞鶴に住んでいると、舞鶴の良さがかえって見えないものだとも思いますし、様々なことを外で見てくることで、「こんな仕組みを舞鶴に取り込みたい」「いずれ舞鶴でやりたい」といった思いにもなると思います。

私は、生まれが舞鶴ではないので、「舞鶴って素敵だな」となんの障壁もなく来たときに思いました。広報まいづる9月号に掲載されている移住された方のインタビューを読んだ際にも、その方が海がない県からの移住で海にワクワクしたとおっしゃっていました。私も海のないところの出身ですので、舞鶴に転勤となったときには、海があるというだけでとても嬉しくて、海があるということの魅力をもっと生かしていければいいと思います。

例えば、府立海洋高等学校は船舶のことだけではなく食品工業のコースがあるなど他にはない魅力を持っています。また、病院に通っているあまり学校に行っていないお子さんが、釣りが大好きで釣ってきた魚を3枚におろせるということを知っています。海のない地域にはそのような子は（なかなか）いないでしょうし、海がない地域の人にとって海はものすごく魅力的なものです。だからこそ、舞鶴で生まれ育った方も一度外に出ることで、海の素晴らしさが改めてわかるんじゃないかという気がしています。

（松岡教育振興部長）

一点、追加で説明をさせてください。最初に人口減少の話をさせていただきましたが、舞鶴を出た子どもたちがどの程度戻ってきていないか、という点についてです。

まず、舞鶴市の特徴をご説明しますと、本市には海上自衛隊の教育隊があり、18歳で約200人から300人が入隊し、約4ヶ月の教育期間を経て、舞鶴に残る方もいますが、多くは全国へ配置されます。また、海上保安学校につきましては、18歳以上の約500人から600人が入学し、1年から2年の教育期間を経て、その後各地に配属されることとなります。さらに舞鶴高専には、15歳以上の約150人が入学し、5年間の課程を経て卒業します。つまり、多くの若い方が市外から一度に流入し、その後一度に転出するという人口構造になっているため、舞鶴で生まれ育った子どもたちが、実際に何人まに残っているのかを把握することが難しいという特徴があります。

お配りしている資料「【参考】人口移動比較」をご覧ください。この資料は、国勢調査に基づく資料になりますが、1995年に10歳から14歳だった5,526人の若者は、進学や就職など人口移動を経て15年後の2010年は4,477人となっています。国勢調査に基づく推計値であり、純粋な舞鶴市出身者ばかりではなく市外からの流入者も含まれますが、単純計算による残存率は81%となります。

同様の手法で見ますと、2015年の調査結果では残存率が75%、直近の2020年の調査結果では74%となっております。推計ではありますが、概ね2割強の方が舞鶴に残っていないという状況であり、また、男性に比べ、女性の方が戻ってきていない比率が高い傾向にあります。

この資料は、最近作成したもので、教育委員会だけでなく市として、このような数値の推移を注視していく必要があると考えております。そのあたりも踏まえ、皆様のご意見をお伺いできればと思います。

吉岡委員、この件について何かご意見いただけますでしょうか。

（吉岡委員）

私も舞鶴の出身ではありませんが、「住めば都」と言いますか、仕事も子育てもしていく中で、そこまで不自由はないと思っています。しかし、人口が減少しているということを何とかしなければいけないとなったら、教育だけではなく、地域や企業など様々な分野を巻き込んでいく必要があると思います。

その1つとして、保護者は必ず巻き込む必要があると思います。保護者は子どもが進学や就職など進路を考える上で、親の意見はやはり参考にしたいと思います。そこで親がどのように（子どもに）伝えていくのか。もちろん舞鶴には大学はないので「大学に行って勉強したかったら行けばいい」と私も言うと思います。ただ就職のタイミングになった際には、「どのようなことがしたいか」「舞鶴に自分がやりたいことができる会社があるか」ということを子ども自身に考えさせる必要があると思います。

日星高校の看護科にある奨学金で、舞鶴の病院に就職すれば返済不要になる制度があると聞いたことがあります。就学時の金銭面については、親の意見も重要になるところですが、大学に行くにしても舞鶴市の奨学金は、例えば舞鶴市の奨学金に「卒業後舞鶴市の協力企業に5年勤めたら返済不要になる」といった、市や市内企業による制度があれば舞鶴に戻ってくるきっかけにはなるのではないかと思います。

「舞鶴に住んで就職してよかった」「かつては盛り上げてもらう子どもだった自分が今度は舞鶴を盛り上げていく」そして「結婚し、舞鶴に新居を構えたい」、そして生まれた子どもが「舞鶴に住んで就職してよかった」、そう思える舞鶴になりそこで子どもを産みたくなる、といった正のサイクルとなれば良いと思います。

少し話は変わりますが、出産をする際に様々な手当が支給されますが、周知されているのでしょうか。周知されていたら、子どもを産もうという動機となり、人口も増えると思います。どこからやっていくかは難しい問題です。

（鴨田市長）

皆さんありがとうございます。

舞鶴はいいところだと大人が伝えていくことは本当に大事だと思っています。私自身も親に舞鶴にいても仕方ないと言われましたし、都会に行って豪華絢爛の世界で良い生活を送ってきましたが、結果的に帰ってきたときに、やっぱり舞鶴はいいところだと感じました。子どもの頃から「舞鶴はいいところ」と言われ続けていれば、結果は少し違ったかもしれませんが、やはり大人が自信を持って舞鶴の魅力を発信できるという環境が必要だと思います。

稗田委員から学習の形骸化の話があったように、私自身、失礼な言い方かもしれませんが、「固定観念を打破する」ことを実は自分のテーマの一つにしております。例えば6年生の子たちが引き揚げについて学習しており、我々としては「ふるさと学習をやっている」と言いたいですが、現実的に子どもたちがどこまで引き揚げのことを本当に思っているか勉強しているかというと、大体の子どもたちは忘れてしまっているのが実情ではないかと思います。現在の学習が、本当に子どもたちに響いているかという問い直しをしなければならないと思います。

もう1つが、社会参加のような活動も、学校の働き方改革がもしかしたら弊害になっているのではないかと考えています。例を挙げると、これまで綱引き大会を毎年やってきました。以前は子どもたちが中心の取組であったため人数が集まっていましたが、学校において「チラシは配るが、事業として取り組まない、呼びかけをしない」となった結果、お願いしてやっと参加してもらうという状況になってしまいました。

それから、市役所で言うと教育部門と市長部局の間には、やはり縦割りの弊害が出ていると認識しており、打破していきたいところだと思っています。冒頭に申し上げた先生方へのふるさと学習というのはその一歩であり、頭の構造を変えないと子どもたちの身になっていかないのではと考えているのですが、皆さんにご意見を伺いたいと思います。

(相澤委員)

給食に地域の食材を使用する話の際に思い出したのですが、以前、伊根町の小学校に行ったときに教室の前に魚の骨が飾ってありました。これは何かと尋ねたところ、当日給食に魚が出て、クラスで一番綺麗に食べた児童の魚の骨を廊下に飾っているということでした。

私自身、農村地域の出身で、野菜があまり好きではありませんでした。しかし、大学で地元を離れ、たまに帰省して食べる具沢山のお味噌汁がとても美味しかったのを覚えています。小さなときに地域の食材をたくさん食べる、そのような食育を大切にしていくことが、郷土愛を育むことに繋がると感じました。地域の食材をどう食べるのかについて、栄養教諭や子どもたちと一緒に考える機会や、食育のイベントがあれば楽しく有意義だと思います。

(鴨田市長)

ありがとうございます。あとは「給食が美味しくないから残す」という問題をどう解決していくか考えていかなければいけないと思っています。本当に美味しいか美味しくないかという問題以上に、「中学校になったら給食が美味しくない」というイメージが生徒にも保護者にも植え付いてしまっています。このイメージを変える必要があります。かといって、子どもたちが好きなメニューだけにするのは、決

して食育にはならない。伝え続けるしかないと思います。相澤委員がおっしゃったアイデアは面白いと思います。

（吉岡委員）

以前、小学校で万願寺甘とうを使った地域ぐるみの試食会があったと思います。口で伝えるだけでは難しいため、子どもたち自身が経験できるイベントがいいと思います。中学校給食にしても、昔は保護者向けの試食会があり、美味しかった記憶があります。保護者が舞鶴の食材を使って給食の献立を考える企画があっても良いのではないかと思います。

（鴨田市長）

おっしゃる通り、実体験が重要ですね。中学校の給食は、中学生が作った献立が採用される日があります。それから、吉岡委員がおっしゃったように、地域の方々からは「地域の大人も試食できたら嬉しい」との声も聞きます。大人に知ってもらうのは大切なことだと思います。

（稗田委員）

中舞鶴小学校の万願寺とうがらしの取組は、総合的な学習の時間をうまく活用されており、子どもたちが「自分たちでやってみたい」ということで、子どもたちでやる取組が少しずつ広がってきていると思います。そこは一つの大きな分岐点だったのではないかと感じています。

それから、市長がおっしゃったように私が教員として現場にいたときは、時間は問わずその校区の地域のお祭りに出たり、子どもたちと一緒に様々な取組をしたり、帰宅の時間は遅くなりますが非常にやりがいを感じながら教員時代を過ごしてきました。しかし、今はそうではなく「昔はこうだったんだ」という話も通じないこともあり、教員も私生活を含めて豊かであることが子どもにしっかりと向き合える環境につながるという考えのもと、働き方改革を進めております。その中で、「この行事は学校として対応しない」という判断も結果として生じていますが、教員の志願者が減り、質の担保ができないのではとされている昨今ですので、この働き方改革の方向性を緩めることはできないのではないかと思います。

一方で、様々なことを削ぎ落とし、業務がビジネスライクになりすぎると、教員がそこに面白さややりがいを感じられるだろうかという問題もあると思います。子どもたちと真剣に向き合う中で、教員がどこまでやりがいを持って日々の教育活動に取り組めるかということが大切だと感じています。最近、京都府教育委員会でも「働きがい」という点に着目されているのではないかと考えています。

(事務局)

教員の「働きがい」は、委員がおっしゃったとおり、私生活も含めて充実させていくことが求められる一方で、先ほど「昔」という言葉がありましたようにそれだけではなく、やはり教員を目指したとき「自分が経験してきたことをやりたい」という思いで教員になっている者もあります。教員の中でもいろんな価値観があり、様々な価値観があり、そのあたりをどう調整していくのかが教育委員会に課せられた課題なのではないかと思っています。ただ、やはり基本として教員は「子どもたちと共に歩み、その成長を支えていきたい」という思いがあります。その思いをどう整理していくか、そして子どもたちをどう活躍させていくかということは、常に考えておかなければいけないことだと思います。時間がかかっても子どもたちの喜ぶ姿を見るのが、やはり教員の一番の喜びであると思っています。

(稗田委員)

おっしゃるとおりです。お給料がもらえるからというよりは、子どもの「先生、できるようになったよ」や「明日も学校でやりたい」といった声は、とにかく教員にとって何よりのご褒美だと思います。今の先生方にも、そうした喜びを日々味わってもらえたらいいなと思います。

(相澤委員)

コミュニティ内での学校のあり方ということで、「学校運営協議会」がまだ十分に組織されていないと感じます。「地域とともにある学校づくり」ということで地域の方に学校の評議員になっていただき、そこで地域の中との交流を深めていくことや、学校の運営方針を地域の中でも承認を得ながら進めていくことを通じて、地域の方に積極的に学校に入っていただき、連携できる体制を構築することは大事だと思います。

私自身、3校ほどの学校で学校運営協議会に入っていますが、そこでは地域の福祉分野の方や、医療現場の方、商工会の方など様々な方が参加しており、そこで「どうしていきましょう、ここはどのように協力できますよ」と話が進んでいます。特に小・中学校は地域の中にあるので、教員だけではなく「地域で子どもたちを育てていく」という意識で進めていくことが非常に大切だと思います。

(鴨田市長)

相澤委員のおっしゃるとおり、先程申し上げた働き方改革の中で、学校教員だけで何かをやるというのは難しい状況です。教員が地域と繋がり、人脈を広げていくことが教員自身の知見を広げることに繋がるとしています。

一方で、コミュニティスクールや学校運営協議会そのものにも地域間の温度差はあり、形骸化している地域も見受けられます。私がPTA会長をやっていたときも「やらなければいけないからやっている」、「地域の方々の意見を聞いて、説明しましたよ」というアリバイ作りの場になっていると感じたこともあります。「雑談

レベルでも繋がりませんか」といった柔軟な発想で、今ある固定観念を変えていかなければならないという課題に直面しています。

どんどん人に頼るという姿勢も必要です。ですから、先ほどの委員の話にもありましたように、身近な人が関わる場や一緒に何かを作り上げていく場があることが大事だと思います。それは著名人じゃなくてもよく、それぞれの分野で頑張っている、誰でもいいと思います。小川委員がおっしゃった「地域で学校と一緒に何かを作り上げていく」という考え方も、非常に良い取組だと思いました。これも、「何をしようか」という発想を生み出すためには、なかなか先生方が自分たちのコミュニティの中で考えるのは難しいのではないかと思います。地域が持っている課題を認識した上で取り組んでいくというようなコミュニティが形成されていることが大事だと思います。

(小川委員)

私もゲストティーチャーとして小学校の授業に参加したことがあります。歯科医院には、歯科医師がいて、歯科衛生士、歯科技工士、受付、助手がいるということで、歯科医院のメンバーで学校へ行き、それぞれが各班に分かれて、子どもたちは将来の夢を話し、私たちは今の職業についての経緯、舞鶴に帰ってきた経緯などを話していました。そのなかで、ある児童から「将来、薬剤師になるにはどうすればいいか」と聞かれ、自分たちのことを話すことで「そういう職業でも舞鶴でも活躍できるよ」という話ができました。

歯科医師に限らず大工さんでも漁師さんでも同様ですが、インターネットで調べると、どうしたらなれるかということとはわかりますが、「舞鶴で育ってこんな経緯でこういう仕事をしている」ということを、実際に働いている人から話を聞いた方が子どもたちに心に響くと思いますし、将来に向けての目標も立てやすくなると思います。そのような事業をどんどん増やしていってもらえたらと思います。

(鴨田市長)

それは学校任せではなく、市長部局が何か考えなければいけないことなのかとも思いました。

(小川委員)

学校は「仕事を休んで来てもらおう」というところにとても気を遣われます。しかし、恐らく趣旨を伝えれば、どの分野の方も快く応じてくださると思います。「舞鶴に帰ってきてくれよ」というアピールにもなりますし、そのような取組を学校現場にどんどん取り入れていったらいいのではないかと思います。

(廣瀬教育長)

コロナ禍前は職場体験等を盛んに行い、地域に開かれた学校を目指して活動していましたが、コロナ禍で途切れてしまいました。現在は、取組における学校間の差が課題だと感じております。例えば、小川委員が学校に入って活動されていたり、地域の中で盛んに活動をされていたりする学校もあれば、そうでない学校もある。学校運営協議会の取組も形骸化している学校もあれば、積極的な学校もあるというような状態です。この差をなくしていくためにも、コロナ禍が過ぎた今、縦割りの壁を取り払い、取組んでいくことが必要ではないかと思います。

先生方への研修では、ただ車で舞鶴を見て回るということではなく、市内企業を見学しディスカッションする中で、企業の先進性や様々な取組を学ぶことができました。それをもって授業で子どもたちに伝えられるということは大事なことだと思います。また、子どもたちが直接舞鶴のことを知る機会として、海上保安学校の校長先生に「子どもたちのためにご講義いただけないか」とお願いに伺ったところ、「ぜひ行かせてほしい。中学校7校全部行かせていただきたい」とのことでした。

また、城南中学校では、校区に大企業「アイリスオーヤマ」の工場ができるということを受け、「子どもたちと何か関係を築きたい」ということで、早速、アイリスオーヤマにコンタクトをとったところ、先方にも積極的にご対応いただいております。企業がこれほど協力的であることに、「そういう時代なのか」と時代の変化を感じました。

それから、市長部局と教育委員会の壁を取り払うべきだと強く感じたのが、先日大阪・関西万博関西パビリオン京都ブースにおいて、期間限定で舞鶴市が展示している週に伺った時のことです。そこでは、ユネスコ世界記憶遺産登録資料の展示、学生語り部による取組発表等がされており、高校生の語り部の生徒が来場者に対して引き揚げについて説明していくのですが、その姿を真横で拝見し、大変感動しました。先ほど言われたように、引き揚げのことは6年生全員が勉強しますが、彼ら彼女らは何が違うかという、引き揚げが「自分事」になっている。「ここで自分は舞鶴のことを語ることができる」という自信と誇りを感じました。訪れる多くの方に積極的に「お話聞いていただけますか」と声をかけ、うまく関係を作りながら展示物をもとに、引き揚げのこと、舞鶴のことを説明していくんです。そして「舞鶴の引揚記念館に来ていただいたら、この数百倍のたくさんの展示があるのでぜひお越しください」といった案内もしていました。将来おそらくこの生徒たちも大学に進学すると思いますが、「いつかは舞鶴に帰りたい」と思うのではないかと感じました。そこまで持っていければいいのですが、他にもいろいろなことを教えるなければならない学校教育だけでは難しく、やはりそういう意味で、現在、市長部局のみで「語り部の講座」などの取組に、教育委員会も連携できたらと思います。

さらに、大連市や浦項市、ポーツマス市に子どもたちが派遣される機会がありますが、学校教育と少し別の次元にある印象です。帰国報告会で子どもたちの話を聞き、多くを学んできたと感じるだけに、市長部局との壁を取り払い、もう少し学校教育と連携させ、国際理解教育をまちとして高めていけたらと思います。

(鴨田市長)

おおむねの方向性が見えたでしょうか。

教育というものは教育委員会が所管ではありますが、地域の人たちみんなで子どもを育てていく「こどもまんなか社会」という視点を踏まえると、市役所の中でも例えば水産課や産業活力課といった部署と連携して教育活動を進めるなど、そこには常に子どもが真ん中にいるという視点が必要だと思います。

(稗田委員)

1つ違った目線でお話させてください。テレビ報道で、高校や大学を卒業した若い女性が、東京を中心とした都会へ出て行ってしまうというようなことが言われていました。先ほど、男性に比べ、女性の方が戻ってきていない比率が高い傾向にあるとお聞きした際に、若い女性の方が帰ってこないという現実を知り、なるほどなと思った次第です。私はその理由を、若い方が求めるような職業・就職先がないからではないかと感じました。

テレビで地方から東京へ出てこられた方々のインタビュー特集が放送されていたのを見かけました。その中で、地方であるほど「女性はこうあるべき、このように生きるべき」という古い価値観が脈々と残っており、「自分らしく生きていくことに息苦しさを感じ、ここから出て行きたいと思った」と話す人がいて、衝撃を受けました。

例えば、職場ではお茶くみの仕事しか与えられない、「何歳までに結婚しないといけない」と言われたり、「妊娠はまだなんですか」と迫られたりするといった実態に対し、コメンテーターが「今の時代では考えられない。令和の時代にまだそんなことが地方ではあるのですか。」と言われていたこと自体にも、また衝撃を受けました。それほど若い女性にとっての息苦しさが東京と地方では異なるということを確認したとともに、これは教育だけでできることではないですが、教員や市役所職員をはじめ、市議会議員の方々など、女性が生き生きと活躍できる社会、女性が働きやすい社会をみんなで目指していくことが、遠回りのようで子どもたちが戻ってきたいと思える舞鶴にするための一つの道であると感じました。

そのうえで、みんなが生き生きと活躍できるまちについて、子どもたちが自由な発想を述べ、それを施策に活かしていくことができたらいのではないかと思います。今、舞鶴市公式SNSで「#みんなでつくる舞鶴2040」という取組があります。それを機に、子どもたちが自由な発想で「中学3年生の自分たちが30歳になったときにどんな舞鶴にしたいか」といった意見を発信できるよう、学校への働きかけを積極的にしてもらい、例えば、市長と子どもたちのスクールミーティングのような形で、将来のまちづくりに対して、子どもたちが自由に発想を述べるような取組があってもいいのかもしれない。そこから何か施策に繋がるヒントが生まれれば、子どもたちの「貢献できた」という実感が、まちを愛する気持ちにも繋がるのではないかと感じた次第です。

(鴨田市長)

稗田委員がおっしゃるとおりで、「女性が生きやすい社会」を掲げて、1年半後に策定する2040年の舞鶴が目指すビジョン「舞鶴市総合計画」に盛り込んでいきたいと思っています。この計画を、「子どもたちも一緒に作った」ものとして「このような社会にしていくためにはどうすればいいか」と考えるための教材として使っていただきたいと思います。その策定の前段において、子どもたちの意見も取り入れていきたいと思っています。それがまさに「#みんなでつくる舞鶴2040」プロジェクト。ぜひこのプロジェクトを周知していただけるとありがたいと思っています。

(相澤委員)

一点、包括的性教育について話させてください。学校の学習指導要領には、性教育という分野は非常に少なく、保健体育のところわずかに取り上げられる程度です。現在、学習指導要領の改定が進められていますが、そこに包括的性教育のあり方といった内容が含まれていくといいなと思っています。私の大学で、発達障害や知的障害のある子の包括的性教育とキャリア発達というテーマを専門とする教員もあり、活用いただければと思います。

(2) 毎日通いたくなる（通いたい）魅力ある学校づくり

(松岡教育振興部長)

本市の不登校の児童・生徒は年々増加、低年齢化傾向にあり、令和6年度の不登校の出現率は、小学校は前年度から0.66ポイント増加の2.43%、中学校は前年度から0.54ポイント増加の9.17%となっております。

本市では、令和6年度から学校現場では学習用タブレット端末を使用した、まいづるこども相談を開始し、不登校等の早期発見、早期解消に向けて支援を行うとともに、これまでから教育支援センター「明日葉」を設置しているほか、民間のフリースクール等と連携し、学習支援や居場所づくりなど、様々な取組を実施しております。

本日は異なる視点から、不登校への対処療法ではなく、そもそも子どもたちが、「楽しい」「おもしろい」と通いたくなる学校、「安心して過ごせる」と思える学校にするにはどうしたらいいかについてご議論いただけたらと思います。

これまでから、学校現場では子どもたちが心身ともに元気に過ごせるよう取り組んでいるところですが、さらに、「楽しい」「おもしろい」「安心して過ごせる」「通いたい」、そのような学校にするには、いろいろな視点から自由にご発言いただけたらと思います。まずは教育長からご意見いただけたらと思います。よろしくお願いします。

(廣瀬教育長)

「魅力ある学校づくり」をテーマに、今から皆さんのそれぞれの専門分野における知見や子育ての経験等からご意見をいただきたいと思いますと思っています。

魅力ある学校作りについては、現在進行形で取組を進めています。1つは安心して安全な居場所をつくり、学校に行きたいなと思えるようにすることです。従来から人権教育等をやっていくとか、ユニバーサルデザイン視点の学校運営をしていく、あるいは主体的な学びで一人一人が理解できる授業、個々の能力を伸ばしていく教育を行っております。そして、先生たちが魅力ある学校づくりが出来るように、先生たち自身が余裕を持てる環境となるよう働き方改革もしっかり進めていこうとしております。

また、子ども同士の絆作りや仲間作りは、昔から学校行事や生徒会・児童会の取組などいろいろな節目の場を使って学校が楽しい場になるような取組をやっております。しかし、先程の説明にもあったように、不登校の出現率はコロナ禍を契機に増加傾向であり、この中には学校がつまらないと思っている生徒がいるという現状があります。今までやっていることを否定するものではないですが、さらに子どもたちが学校へ通いたくなる、楽しい場所だと感じる事ができる学校づくりを進めていくことが大きな課題になっています。広い視野から「こんな学校になればいい」というようなご意見を頂戴できればと思っています。

私の意見を1点述べますと、今の子どもたちは受け身になっているように感じます。「子どもたちが主体的な学びができるように」とか「子どもたちの主体性を伸ばしていこう」というような取組も活発に行っていますが、色々なことが他人事になっていると感じます。「自分が働きかけたら世の中が変わる、学校が変えられる」、そのような主体的に関わっていける環境を作っていければ、前向きに学校に通うようになるのではないかと思います。

(鴨田市長)

まず子どもにとって学校の魅力ってなんでしょうか。そのような視点からでもぜひご意見いただけたらと思います。

(四方委員)

子どもにとって何が魅力かという価値観が変わってきていると思います。かつては、学校へ行かずに家にいたら退屈であったと思いますが、今は家にいてゲームなどがあるため、それよりも魅力的なことを提供しないと魅力的ではないのではないかと、とても難しいと思っています。

また、自分が楽しいと思うことが、別の人にとっては楽しくないということもあるでしょうし、クラスの8～9割の人が楽しいと思っても、残りの人にとってはそうではない、ということもあると思います。昔は、運動会は皆楽しかったんじゃないかなと思いますが、今はそれだけでは全員の満足を得るのは難しいかなと思っています。

最初の議題と関連していると思いますが、学校が楽しい思い出として記憶に残っていれば、将来舞鶴へ戻ってくる子が増えるのではないかと思います。

青葉中学校では「さくらプロジェクト」として、空き缶回収で得たお金で桜の木の苗を買い、植え、それだけで終わらずに、関わってくれた皆さんにお礼状を送ったり、地域には回覧板でプロジェクトについて共有したりされていました。どのくらい地域の方が関与されて、生徒たちからアイデアが出て、先生が管理されたかは分かりませんが、先生が夜遅くまで残業しなくてもできたのではないかと思います。アイデア次第では働き方改革と両立できるのではないかと思います。おそらく卒業生は、どのくらい大きくなったか見に行きたくなると思いますので、素晴らしいプロジェクトだと思っています。

それから、そのような大きなプロジェクトでなくても、「〇〇週間」のような取組は頻繁にあっていいと思います。「今週は〇〇の週間にしよう」と、たとえクラスの大半が面白いと思わないアイデアでも、1週間ぐらいであれば他の生徒たちも付き合ってみようと思うかもしれませんし、年1回の大きな行事だけではなく、そうした小さな取組から盛り上がりを生み出す機会があってもいいと思います。

(鴨田市長)

確かに、「〇〇週間」というように、何をしたいか子どもたちに考えてもらうところがいいですね。実行に移すことは子どもたち自身のやりがいに繋がると思います。これは、先ほど小川委員がおっしゃっていた「地域の課題を解決するために、地域の人と一緒に作り上げていく」というところにも相通ずる点があると思います。

(相澤委員)

学校に魅力がなくなったというよりは、家にあるものが魅力的になってきたのではないのでしょうか。例えば、ゲームやインターネットのように、すぐに結果が出るようなものが小さい時から身の回りにたくさんあって、好みでなければすぐに変えられる環境が身近になっています。それに対し、学校というのは、結果を待つことや我慢して何かに取り組むことで成果が上がるという喜びを、どのように経験していけるのかが非常に重要なところだと思います。

私が視察に行った小学校では、チーム担任制という制度を導入している学校がありました。これは2つのクラスを2～3人で担任するイメージで、そうすると子ども

と大人の関係も複数生まれるほか、成績評価を分担して行うことなどが可能になります。また、教科に分けて分担するような中学校の教科担任制のようなことも少しずつ広がってきています。そして、これらは校長先生の裁量で導入できるものです。教員の負担が減り、子どもたちと関わる大人が増えることで、学校の活性化につながります。また、子どもたちにとっては「この先生との関係は難しいが、こちらの先生なら大丈夫」といった精神的な安心感や選択肢が生まれることも期待できます。これらは学校の工夫でできることです。

また、「学びの多様化学校（いわゆる不登校特例校）」というのが、京都市には2校、かなり以前に作られました。不登校の子どもたちが通えるこうした学校が、現在全国には58校、毎年15校ずつ増えてきており、不登校で学校に通えなくなった子どもたちが通える場所も増えてきているのが現状です。

それから、子どもたちは基本的に探究活動が好きだと思います。「ゲームのレースもどうすれば一番になれるか」を考えるのも、「ダンジョンをクリアするためにどうしたらいいか」と考えるのも探究活動だと思います。だから、教授・学習行動の中で一方的に教え込んで覚えさせるということだけではなく、自分たちで考えて答えを出す学びに変えていこうという流れになってきています。全ての教科で行うことは難しいかもしれませんが、ある教科については、自分たちで考え、データを集め、何があれば結果としていいのかを分析し、試行錯誤の末うまく行かないかもしれないというような経験を、総合的な学習の時間などを通じて学校で行えるようにしていくことが、今求められていることではないかと思います。

（稗田委員）

まずは子どもたちが、互いを認め合って良好な人間関係であるということが一番の基礎になると思います。それがなければ、どんな良い取組であっても、前に進んでいけないと思います。

2つ目は、相澤委員のお話にもありましたが、探究的な学びをもっと子どもたちの発想で取組を進めることができると、子どもたちが「明日行ってこれを調べてみよう」とか「先生に伝えてみよう」というように、次の日の学校への魅力になるかなと思っています。

引き揚げの学生語り部やさくらプロジェクトは、生徒自身が「自分事」として学びに関わっているのので、そのようなことができると「学校は自分たちの力で何かができる場」という大きな魅力を感じるのではないかと思います。

3つ目は、学校の多様性が今後必要なことではないかと感じました。チーム担任制や教科担任制、学びの多様化学校などもその一つの姿だと思います。

技術革新によって社会はどんどん変化している中で、「学校は変わらないよね」とか「学校は黒板とチョークがあれば授業ができるよね」と言われた時代が長く続いていましたが、GIGAスクール構想とコロナ禍を契機に、今ではタブレット端末が1人1台配備されて、大きく環境が変わりました。

ただ変わらないこともあって、学校の良さという点では、学校ではみんなで学ぶ、学習だけではなく社会的なルールや絆を学ぶ、1つのことを全員で学ぶ、グループで競い合いながら高め合うことをやってきました。それが日本の特徴であり良さでもありましたが、その中で息苦しかったり、自分らしく生きられなかったり、そのようなことを感じて学校へ行きづらい、集団に馴染めない子どもたちが出てきているのではないかと思います。不登校児童生徒が増えている要因は多種多様ですが、そのうちの一つとも言えるのではないかと思います。

今、不登校や発達障害、日本語を母語としないなど支援を必要とする子どもたちが非常に増えてきており、多様化しています。そのような状況で、子どもたちに多様な学び方や多様な価値観を知る場を学校教育が提供できているかというところ、ツールは新しく変わっても、学びのスタイルは依然として変わっていないのではないかと感じます。

現在審議されている次期学習指導要領では、「柔軟な教育課程」の導入ということが取り上げられています。これまでの教育の継続性を大事にしつつ、多様な背景を持つ子どもたちの可能性を引き出すような学校作りが求められているということです。ですので、「できない」と決めてしまわず、少し柔軟に発想して、子どもたち1人1人の「個別最適化の学習」だけでなく、「個別最適化の教育」という視点で学校作りを発想していくチャンスが到来しているのではないかと捉えたいと思います。

(松岡教育振興部長)

吉岡委員は、子どもたちから何か学校のことで会話をされることはありますか。

(吉岡委員)

子どもに「学校どうだった？」と聞いても、「別に」「普通」と返事されるのが日常だと思います。それが「今日こんなことがあって、こうで、こんなのがすごかった」と話してくれるときは、おそらく子どもたちが、学校が面白い、楽しいと思っているときだと思います。

先生方が子どもたちから「これができた！」「ここが分かった！」と言われて成長を感じることが「やりがい」に繋がっているのと同じで、子どもたちは先生から褒められることが、喜びや自信に繋がると思います。些細なことでもいいので、褒めてもらえた経験が、子どもたちにとっては嬉しいことだと思います。そのようなことがあれば、それをきっかけに自己肯定感が上がって、家でも学校での話を教えてくれたりすると思いますし、不登校になる子どもたちも減っていくのではないかと思います。

(松岡教育振興部長)

最初のテーマでも、吉岡委員は保護者を巻き込むことについておっしゃっていました。学校、全教員と教育委員会、保護者が同じ方向を見て子どもたちを育てるとするのが大事なことはないかと思いますがいかがですか。

（吉岡委員）

小川委員がおっしゃった学校ごとに発表し競い合うイベントなどを開催すれば、保護者はおそらく見に来ると思います。例えば「講演会をしますので来てください」と案内をしても、仕事をされている方が多く、内容に参加したいと思えるほどの魅力がなければ、なかなか難しいと思います。やはり保護者が「行きたい」と思って参加するのは、子どもの活躍を見る場だと思います。中舞鶴地区ですと、幼稚園も保育所も小学校も中学校のクラブも集まって開催される「ふれあいサンデー」があります。そこは、子どもが発表するということで、保護者がたくさん来られます。先日の事例でも、子どもたちが災害について調べ「舞鶴ではこういう災害がある」「ここが危険な場所だ」「こうして行きましょう」内容を発表した際、保護者は特に強く呼びかけなくても集まります。

子どもたちが研究し、それについて発表する機会を設ければ、保護者は来ますし、地域の方も来られます。そこで地域を巻き込み、一体感を生み出すことができると思います。そのような取組が増えていけば、関係はもっと密になっていくのではないのでしょうか。

（鴨田市長）

本来、PTAは保護者と先生が一体化した組織ですが、昨今の課題として、いわゆる「モンスターペアレンツ」に象徴されるように、本質的な家庭教育を蔑ろにし、学校に責任転嫁してしまう風潮が、先生方にしんどい思いをさせている要因だと思います。「学校改革」「先生改革」というような議論もありますが、実は、保護者と「本来の教育とは」「家庭教育とは」のような原点問い直す場をもつことも大事なことだと思います。

（吉岡委員）

和田中学校ではPTAの会員が少なくなっているので、PTAを役員制ではなく全員がお手伝いしたいことを何かしら担うという方式に変えました。保護者と学校が密に連携することが大事なので、「やらされている」という気持ちではなく、自分も学校運営に参加するという考え方を保護者には持っていただきたいと思います。

（鴨田市長）

一度、整理しようと思います。相澤委員がおっしゃっていたチーム担任制など先行事例を参考にし、取り入れていく事は大事な視点だと思います。学びの多様化学

校のお話もいただきましたが、学校規模の適正化を進めながらも、不登校対策を民間のフリースクールも含めてどう考えていくかというのは大きな課題です。教育委員会だけの問題ではなく、市役所として次年度に向けて検討しているところであり、この多様化についても注視していきたいと思います。

小川委員、いかがですか。

(小川委員)

「一番行きたくないところは歯医者。子どもたちが絶対行きたくなる歯医者を目指す」。これが30年前の我々歯科医の課題でした。かつて歯医者は、削られるということで「泣きながら来て、泣きながら帰る」場所でした。それが今は喜んで通ってくれる時代になってきました。

学校に行きたくないと思う理由は、やはり学校に対して不安があると思いますし、ゲーム以上に魅力があるものがなくなってきてる事も考えられますが、学校に対して「わくわく感がない」ということだと思います。最初の議題でもありましたが、何かワクワクするような取組として、最澄の教え「一隅を照らす」のように、「君ひとりでも欠けたらできない」という全員が必要とされるプロジェクトにみんなで行きついたら、みんながわくわくしたり、「今日は休めない」と思ったりするのではないかと思います。そのようなテーマを設定して取り組むことがいいのではないかと思います。

(鴨田市長)

四方委員と小川委員の話を聞いて思い出したこととして、廣瀬教育長とも話をしていたのですが、滋賀県の彦根市が、各学校の生徒会に10万円を交付し、学校に資することや自分たちがしたいことに使っていいという取組を今年から始められました。これは子どもたちが使い方を考える取組で、子どもが主体になり目的を持って実行していくという意味では、面白い取組だと思って参考に上げさせていただきたいと思います。しかも、財源は単純に市から支出するのではなく、ふるさと納税を活用して資金を募っている点も興味深いものでした。

中学生が学校に通ってはいても、面白いとはなかなか言いません。何が面白くないのかと言語化することは難しいようですが、出てきたワードから推察すると、やはり自分たちで何か作り上げる場が少ないのではないかと感じました。

ところで、保護者目線で聞きたいことなんですが、舞鶴の中学校にはなぜ文化祭がないのでしょうか。

(廣瀬教育長)

昔は文化祭で劇などをしていたが、「お祭り」というより総合的な学習の時間として発表会というような形にシフトしてきているところが多いのではないかと思います。

（鴨田市長）

文化祭は、特に高校は何ヶ月も前から一致団結して作り上げていき、そのような活動は非常に大事なのではないかと思います。今年度で、「舞鶴市中学校文化祭典」が最後になると聞いています。そのようなイベントがどんどんなくなっていくことも、時代の変化や働き方改革など様々な要因があって判断されてきたことだと思いますが、子どもたちが自分たちで何かを作り上げる機会が、特に中学校は少ないという印象を持っております。

（相澤委員）

合唱祭はクラスを一つにまとめる上ではすごくいい企画で、みんなで練習するし、「放課後残って練習しよう」と練習していたりした記憶があります。そこでは教師の働きかけも大切だと思います。

（廣瀬教育長）

合唱コンクールは、今も全ての中学校で取り組んでおります。ただ合唱についても、合唱に入れる子ばかりではなく、多様性という点での議論が出ています。だからといって何もかもなくすというのは違うかなと思っております。

（相澤委員）

多様な子どもたちがいることに目を向けて、どうしたらいいかということ子どもたち自身が考えていく機会があることもすごく大事だと思います。

舞鶴は市内にある特別支援学校に通う子どもたちが舞鶴市内在住だけというように、府内でも特別な環境にあります。その中で多様な子どもたちがいることを小・中学生のうちから知るために、居住地校交流が進められています。その地域の学校に籍をもつ「副籍」という仕組みもあり、籍のある学校の一員として交流する取組もありますが、さらに、一緒にできることを子どもたちが考えていくようなことができれば、自分のことだけでなく、他の子に対して優しい気持ちを持つことや、皆が安心・安全に過ごせるためにどうしたらいいのか考えることにもつながると思います。さらに、教師だけが働きかけるのではなく、子どもたち自身が「こうしたらいいのではないか」と提案し決めていくプロセスが実践されていけば、発達障害のある子もない子も共に生きる「共生社会」の実現につながっていくのではないかと思います。

ダイバーシティ教育や、特別支援を必要とする多様な子どもたちにどう向き合うかというお話もありましたが、ベースを作るのは大人だとしても、子供たち自身の課題・テーマとして取り組んでいく、変えていくという学校教育が実現できていくと、魅力あるまちづくりにも貢献できるのではないかと思います。

（廣瀬教育長）

教師は、常に「ここまでにこれをしなければならない」という状況に追われており、責任感の裏返しですが、ルールに乗せたいと思ってしまうところがあります。

私が教師になった理由の1つに、先生になれば学校の文化祭にずっと携われるということでした。文化祭は本当におもしろかった。文化祭は、生徒はやらされているのではなく、自分たちで何か作り上げていくという面白さがあったと思います。彦根市の取組において生徒が、お金をどう使うか。学校のため、自分たちのため、あるいは地域のためかもしれない。決められたルールがない中でみんなで議論する取組そのものが楽しいと思います。

（鴨田市長）

多様性を認めるまちは安心感があると思いますし、このまちで生きていくということになったときに非常に大切な視点だと思いました。

先ほどの彦根市のように、生徒会にお金を交付して自由に課題を考える機会をつくるという取組について、皆さんはどう考えられますか？

（稗田委員）

考え方として面白いと思います。教育長からもありましたように、やはり教師というのは、「子どもたちが主体的にやるんだよ」「次はあなたたちの番だよ」「勉強だからね」と言いつつ、子どもたちが成果を得られるように、学びの途中でずっこけないように、裏ではしっかり計画を立てて側面から支え、時には前からガンガン引っ張っていくこともあります。

皆さんのお話を聞いていて、多様性や文化祭の話もありましたが、要は「こどもまんなか社会」とはよく言われていますが、「こどもまんなか学校」になっているのか、という点が今日の話の共通点だと感じました。

教員は働き方改革の中で、子どもたちのために様々な課題の解決をしようと四苦八苦していますが、子どもたち自身が「自分事」として考えるという場をいかに学校の中で作っていくかが鍵になると思いました。いろいろな課題がでてきたとき、彦根市の取組「生徒会での10万円の使い道」や、特別支援学校の話「どのように一緒に学び楽しいと思って帰ってくれるか」というようなことも、とにかく子どもたちと一緒にテーブルに乗せて考えてみるということが、今、十分にできていないところもあると感じました。

(相澤委員)

イエナプランというドイツの教育手法があります。子どもたちが話し合って決めていくというものです。これは、例えば3年生と2年生が（異学年で）一緒になり、3年生がリーダーシップを取りながら話し合い、次の年はその時の2年生がリーダーシップを取るといった形で、何をするか決めていくものです。自分で決めていく、自己決定できる機会が、全てでなくても良いですがあれば良いのではないかと思います。今、「自由進度学習」というものも進められているところもあり、それも「この時間で何をするか」を自分で決めていくというものです。

先日、相談があった事例では、「1年生児童が「学校はなんでやることが決められているのか、学校には行かない」と言って行かない。どうしたらいいのか」という内容でした。幼稚園・保育所では、子どもが自由に活動を選べる「自由保育」というものもありますが、学校では、決められた中で生活しなければなりません。その中で少しでも自分たちで決められる部分ができるということは、子どもたちの喜び、自主性や主体性に繋がっていくのではないかと思います。

(鴨田市長)

子どもたちが学校に対する満足度とかやりがいを得るだけではなくて、社会人として必要になってくる発想力とか決断力とかを身につけていく、という教育にもなると思います。

(四方委員)

話題と少しずれてしまうかもしれませんが、以前は、保健室は先生がすごく優しくゆっくりできる場所だったのが、今の学校の保健室は1時間しか居ることが出来ないルールがあると聞きました。時間を決めないと、不登校の子たちが長時間滞在してしまい、保健室としての本来の役割が果たせなくなるから、ということでした。かつての保健室が、今で言う「こどもの居場所」の役割を担っていたのかもしれませんが、保健室のあり方が昔とは変わってきたことで、学校内で無条件に安らげる場所が失われたのではないかと感じています。「保健室登校」として保健室を使用するだけでなく、もっと前の段階で、「今日は保健室でゆっくりしたい」というように気軽に立ち寄れるよう敷居が低くなれば、不登校まで行かずに立ち直れる子もいるのではないかと思います。

(廣瀬教育長)

学校の「居場所づくり」ということで、保健室が居場所になっている学校もあれば、校内の教育支援センターをつくっていったる動きもあります。

(松岡教育振興部長)

皆様、ありがとうございました。時間になりましたので、協議はこれで終わりとさせていただきますと思います。本当に活発にご意見をいただきましてありがとうございました。いただきましたご意見を今後の施策に活かしていきたいと思います。

3. その他 特になし

4. 閉会